

## はじめに

あなたが今、『演劇入門』という本を手にとってくれた理由はなんでしょう。

演劇を始めようと思っっているから？ よく演劇を見ていて、もっと深く演劇を知りたいと思っただけから？ 演劇をやっているけれど、よく分からなくて詳しく知りたいと思っただけから？ 演劇が自分の仕事に應用できないかと考えて？ それとも、このデジタル時代に演劇が残っていることが不思議でしょうがないから？

理由はともあれ、演劇に関して、僕が自信を持つて言えることはひとつです。

それは、「演劇は楽しい」ということです。これだけは自信を持つて断言できます。

演劇は楽しいです。見るのはもちろんですが、作品を創るのも、ちょっとだけやるのも、演劇的手法で遊ぶのも、ものすごく楽しいです。

プロだろうが、アマチュアだろうが、つまりは、学芸会や、趣味サークルや、地域の社会人劇団や、中学・高校・大学の演劇部やクラス演劇やさまざまな劇団など、いろんな演劇はものすごく楽しいものです。

それから、演劇的な手法を、授業やビジネスや治療に使うことも、予想を超えて楽しいです。もちろん、楽しさの裏には苦しさやしんどさがありますが、でも、結果的には、間違いなく楽しいのです。

ということを伝えたくて、この本を書きました。

僕は、中学2年の時、演劇と出会いました。

僕の通っていた中学校では、週一回の「クラブ活動」を選ぶという授業がありました。

もともと、放課後は「部活動」として「ソフトテニス部（軟式庭球部）」に所属していました。

それとは別に、授業として週一回だけ好きな「クラブ活動」を選ぶというシステムでした。

今で言う「総合的な学習の時間」に近いでしょうか。地方都市の市立中学校が、どうしてそんな

楽しいカリキュラムだったのか、今となっては分かりません。

とにかく、そこで僕は「演劇部」に参加しました。

練習の前に、演劇を語ってくれた中学3年生の先輩は、とても賢そうに見えて、僕は単純に

感動しました。

ところが、その先輩が演技を始めた途端、印象はガラリと変わりました。

教室で、椅子や机をどけて舞台の代わりとして空けられた空間に立つ先輩は、なんとというか、

じつに貧弱な存在に見えました。

演技が下手ということではなく、迫力不足で、とても薄っぺらい身体からだに感じてしまったのです。

それは、魔法が解けた瞬間のようでした。「熱いトーク」という魔法が消えた後、現れた貧弱な身体は、これが先輩の本来の姿だと感じられました。

別の先輩の場合は、まったく逆でした。

演劇に関する話は下手で、「この人、どうなんだろう」と失礼ながら思っていた先輩が、セリフを言いながら動き出した瞬間、ものすごく魅力的に感じたのです。

そのギャップは衝撃でした。

かっこよくてセクシーで、豊かな感情が伝わってくるようで、この人をもっと見ていたいと感じました。

これはいったいなんだ？ と中学2年生だった僕は思いました。

なぜ、こんなことが起こるのか？ これは演劇と関係があるのか？

別なケースもありました。

いつも自信満々に話すクラスメイトが演劇部に参加しました。テレビドラマや映画の感想も、

「自分の見方が正解」という風に語りました。その姿を見ながら、僕はずっと違和感を持っていましたが、それが何か分かりませんでした。

いつものように、自信満々に話した後、彼は演技を始めました。

20人ほどの部員に見つめられながら、舞台となった空間で演技している彼を見て、僕は思わず声を上げそうになりました。

彼は、怯おびえていました。いえ、正確には、「怯おびえてはいけない」と怯おびえていました。

大勢の部員に見つめられながら、ぼつんと空いた空間の真ん中で、必死に演技をすればするほど、彼の「怯おびえ」はひりひりと伝わってきました。

ずっと感じていた違和感は、これだったのかと、僕は納得しました。

彼は、日常では必死に「自信満々の自分」を演じている。日常のレベルでは、それはごまかしても、人前で演技をする時には、こんなにも無残にそして鮮やかに、彼の「怯おびえ」は伝わんだ。

非難しているわけでも批判しているわけでもなく、ただ素直にそう感じられました。

何度も、中学校の演劇部でそんな変化を目撃するうちに、これは演劇というものが持っている力なんじゃないかと考えるようになりました。

どうも、演劇には人間を皮剥むく力があるんじゃないか。その人の隠れていた本質を引き出

したり、拡大したり、あらわにする能力があるんじゃないか——そう考えて、僕はいきなり、演劇というメディアに夢中になりました。

どうして演劇にはそんな力があるんだろう。その秘密を知りたいと熱望しました。

それが、僕の「演劇の旅」の始まりでした。中学2年生から始めて、もう45年ほどがたちましました。

そのうち、35年ほどはプロとして演劇を追究しています。

いまだに、演劇の秘密を解明したとは言えません。まだまだ、分からないことだらけです。けれども、ここらへんで、中間報告をしてみようかという気持ちになりました。

どうしてそんな気持ちになったのか、いくつか理由があります。

ひとつは、演劇を知っていると、生活に役立つことが多いということを伝えたいと思ったからです。

後から詳しく説明しますが、演劇は劇場にだけあるものではありません。

あなたがいて、目の前にもう一人の人間がいれば、またはいると思えば、そこに演劇は生まれるのです。

もし、あなたが目の前にいる人に何かを伝えたいとか、コミュニケーションしたいか思ったら、演劇のテクニクや考え方、感性は間違いなく役に立つでしょう。

また、演劇は、いろんな可能性があるのに、日本ではまだまだ理解されてない、というのも、この本を書いた動機です。

日本は世界に誇る能や狂言、歌舞伎の伝統を持つ国ですが、演劇そのものへの関心は、観客数や文化予算、教育的利用などの面から見ても、欧米に比べれば残念ながら低いのです。

学校でも、教科としては、「音楽」や「美術」はあるのに、「演劇」はありません。

中学教育では、「ダンス」と「武道」は必修になりましたが、小・中・高の国語の教科書からは、どんどん「戯曲」という「演劇の台本」が消えていきました。

新型コロナが蔓延まんえんした時、演劇人が政府の「自粛要請」に対して「休業補償」を求めました。僕もテレビやネットで発信しましたが、激しい中傷や悪口をたくさん受けました。それには、演劇というものは特権階級がやっていて、自分達とは何の関係もないもので、好きなことやっている奴やつが失業したり倒産するのは当然なのだ、という意見がたくさんありました。

僕はひとつひとつの意見に心が折れながら、これはそもそも演劇が多くの人から遠いものだから言われているんじゃないかと考えていました。

演劇と人々の距離に哀かなしい気持ちになったのです。

いえ、希望もあります。

本やCDなどの売り上げが毎年、落ち続けている中、ライブ・パフォーマンスの観客は、世界的に伸び続けています。日本では、2019年までの20年で、観客数も公演数も約3倍になったというデータがあります。

人々は、ライブで生身の人間を見たいのだと思います。人が同じ空間で生身の人間を見ることが。それは間違いなく演劇です（もちろん、ライブ・パフォーマンスには、音楽系のコンサートも含まれます。観客は、音楽系も演劇系もイベント系も増えているのです）。

もつともつと、人々が演劇に親しむきっかけになればいいなと思って、この本を書きました。『演劇入門』ですから、各論に深入りはできませんが、演劇全般、演技、演劇的知識、演劇的手法、演劇教育などを楽しく伝えたいと思います。

でも、一番、伝えたいことは、演劇は心や身体が震えるほど楽しいんだということです。それでは、演劇の旅を始めましょう。



# 目 次

## 第一章 演劇とは何か？

---

ピーター・ブルックの言葉／演劇とは、俳優と観客である／

スポーツは演劇なのか？／寺山修司の「戸別訪問演劇」と「書簡演劇」／  
意識の共通性／「見る人」を想定する／

人間は演じる存在／私達の人生は演劇そのもの／世阿弥による定義

## 第二章 映像との違い

---

「演劇」と「映像」はどう違うのか？／演技の違い／稽古の長さ／

俳優の感じた感情は、観客に伝わる／カメラの存在

### 第三章 ライブであるということ

---

演劇はお客さんによって変わっていく／舞台が育てるもの／

喜劇はライブが向いている／「舞台の上で漂う」／

スタッフ・ワークもインタラクティブ／芝居の質は常に揺れる／

喜劇と悲劇／「二日目落ち」／アクシデントに向き合う

### 第四章 一人と大勢

---

「幻の共同体」——観客が観客に出会う／神なき祝祭／

「たった一回」の愛おしさ

### 第五章 演劇と小説

---

演劇の情報量／演劇は人生そのもの／映像は小説と演劇の間／

観客の主体性／小説の内面描写／「リアリティの幅」／

演劇でしか描けない方法

## 第六章 情報化社会と演劇

「より多くの人へ、より速く、より正確に」／「より多く」への懐疑／  
完成までの速さ／人間の速度への誤解／正確さか、創造性か／  
「より親密に、より着実に、より創造的に」／スマホについて／  
距離を取りたいのか、深く交わりたいのか／演劇の始まりを考える／  
演劇は模倣である／芸術と芸能の違い

119

## 第七章 演劇の創り方

台本を前に考える／演劇の面白さは俳優の面白さ／心が動く時が面白い／  
「ふり」の問題／心を閉じた会話のつまらなさ／演技は「心の旅」／  
演技はセリフの決まったアドリブ／「自画像」という練習方法／  
スタニスラフスキーの「与えられた状況」／「自意識」は演技の敵／

141

## 第八章 なぜ子供達に演劇が必要なのか

目的を明確にする／障害を考える／演技を始めたら、すべて忘れる／  
「行動」／上演のまとめ／どんな役でも人生の可能性のひとつ／  
舞台は、感情を吟味する能力を与える／存在感とはその人の耐えてきた量／  
『プリズン・サークル』

他人を生きて、発見する／演劇の教育的機能／

「人に迷惑をかけるな」という呪い／

演劇系の学生の「コミュニケーション能力」の高さ／間違ふことの効用／  
シンパシーとエンパシー／「演劇教育」／「話し言葉」を見つめるきっかけ／

「表現」と「表出」の違い／演劇教師／シアターゲーム／鬼ごっこ／

「ロール・プレイング」／学芸会／「段取り芝居」／言葉に敏感になる／  
スタニスラフスキーの輪／不自然な接客マニユアル／

「説明セリフ」／本気で人と話そうとしない日本社会